

Title	廬隠の小説における男性二人・女性一人の三角関係：「藍田の懺悔録」を中心に
Sub Title	The love triangle of one man and two women in Luyin's novels : with a focus on "Lantian's confession"
Author	松倉, 梨恵(Matsukura, Rie)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.118, (2020. 6) ,p.136 (107)- 149 (94)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01180001-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

廬隱の小説における男性二人・女性一人の 三角関係——「藍田の懺悔録」を中心に

松倉 梨恵

1. はじめに

五四時期を代表する女性作家・廬隱（1899～1934）は、多くの作品において時代の変革期に置かれた女性たちの苦境を悲哀の表現によって描き出した。主人公の多くは新式教育を受けた女性で、彼女たちが恋愛・結婚に直面したときに挫折や苦悩を味わう。恋人から裏切られる女性を描いた「藍田の懺悔録」（1927）¹も、その一つだと言える。これまでの多くの研究では、この作品は、新旧の価値観が交錯する時代において、自由恋愛が女性に危険をもたらしうることを描いた作品だと見なされている。例えば常彬は「廬隱の「時代の犠牲者」「藍田の懺悔録」等の小説は、女性の経験から出発して、若い男女の同盟という美しい夢を打ち破った——たとえ自由恋愛という現代的な愛の法則であっても、女性を欺き誘惑する手段として男性に利用され、それ自身が持つ男女平等・相互尊重という人道主義的な精神的意味を失いうるのだ」²と指摘する。また劉乃慈は「短編小説「藍田の懺悔録」（1927）は新式女子が父権の抑圧によってもたらされる不幸から逃れることの難しさを訴えている」³と述べる。また一部の論文では、この作品について、夫から裏切られる女性を描いた「時代の犠牲者」（1928）⁴とともに、主人公の女性が「第三者」（浮気相手）と手を取り合う点を指摘している。胡曉燕はこの女性たちの関係を「女性弱者の同盟」と呼び、「このような被害女性のあいだの同情は女性の人としての意識が覚醒したあとの自覚的行為であり、そこには女性の人としての尊厳の擁護、女性の人としての切なる呼びかけが含まれている」と述べている⁵。

孟悦・戴錦華が「男性たちは廬隱の姉妹を連れ去るが、彼女たちを幻滅させたり萎れさせたりするばかりで、幸福や充実、成熟をもたらさしめない。廬隱の背景には、ただ娘／少女と少女のような婦人しかいない」⁶と指摘するように、廬隱の作品には男女の恋愛が描かれた作品においても、しばしば女性同士の親密な関係が描かれる。また廬隱には「麗石の日記」(1923)⁷「漂泊の娘」(1932)⁸といった女性同士の恋愛を描いた作品もある。廬隱の作品における女性同士の関係に注目したこれまでの研究では、主に「海辺の友」「麗石の日記」「東京小品」について論じられている⁹が、「藍田の懺悔録」を含め、そのほかの作品に関する詳細な考察は、管見の限り見られない。

アドリエヌ・リッチは「強制的異性愛とレズビアン存在」¹⁰において「たんに女性が他の女性との生殖器的性経験をもち、もしくは意識的にそういう欲望をいだくという事実だけ」¹¹ではなく「それをひろげて、女同士のもっと多くのかたちの一時的な強い結びつきを包みこんで、ゆたかな内面生活の共有、男の専制に対抗する絆、実践的で政治的な支持の与えあいを包摂」¹²した「レズビアン連続体」という概念を提唱し、女性同士の様々な結びつきをレズビアンに連なるものとして捉えようとした。

本稿では、廬隱の描く女性同士の親密な関係を「レズビアン連続体」と考え、「藍田の懺悔録」において、それがどのように描かれているのかを考察したい。

2. 廬隱が描く男性一人・女性二人の三角関係¹³

実は、廬隱の作品には上で挙げた二作品以外にも、女性主人公の恋人／夫に別の恋人／妻がいた、という作品が複数書かれている。五四期の中国では、親がすべてを取り仕切って行く旧式結婚（包辦婚）がまだ広く行われるなか、五四思想の洗礼を受けた若者たちは恋愛結婚を望み、親と子で結婚をめぐる意見が激しく対立したり、恋愛相手にすでに旧式結婚による配偶者がいたり、様々な問題が浮上し、それらをテーマにした作品も多く書かれた。廬隱が描いたのも、そうした作品群のうちに入れられるだろう。ここで、上記の内容が描かれた廬隱の作品において、男性を挟んだ女性同士がどのような関係を結ぶのかを見てみたい。

「海辺の友」(1923)¹⁴は女学校時代の親友グループ五人の物語である。主人公・露沙は梓青と愛し合うが、彼には旧式結婚による妻がいた。彼が露沙に妻と

離婚する意思を告げると、露沙は「女に生まれたというだけで、すでに不幸なことなのに、もしそのうえ夫に捨てられたら、ほかに生きる術がある？ それが私のせいだなんて、耐えられない」¹⁵と話す。最終的に露沙は梓青と生きることを選ぶが、その心には悲しみが満ちている。

「勝利の後」(1925)¹⁶は、沁芝が旧友・瓊芳に宛てた手紙という形式をとった小説である。手紙のなかで、二人の共通の友人・冷岫について記される。冷岫の恋人・文仲は既婚者であった。二人は先妻の同意を得た上で結婚するが、冷岫は「完全な愛には第三者の存在は許されないと考えている——たとえその第三者が単なる形式だとしても、その愛には欠陥ができてしまうのだと！」¹⁷のであった。沁芝はこの先妻について「虚名が冠せられるだけでわずかな愛も得られない文仲の前妻、彼女たちの悲しみや痛みは想像するだに耐え難い」¹⁸と述べており、強い同情がうかがえる。

「藍田の懺悔録」(1927)では、藍田は親の決めた結婚を拒んで故郷を離れたのち、北京で学校に通い、通信員として働く。のちに学生時代に知り合った何任と恋に落ち、婚約するが、彼は二股をかけており、別の女性と結婚。藍田は彼の目当ては自分の収入だったのだと悟る。藍田は病に臥せり、収入も絶たれる。そんな彼女のもとに、ある日、何任の妻が訪ねてくる。彼女は藍田の手を取って、何任が二股をかけていたとは知らなかった、自分たちは二人とも犠牲者なのだと訴える。

「時代の犠牲者」(1928)は、教員の李秀貞の悲しい経歴の物語である。彼女は親の決めた結婚をして、十三歳になる息子がいるが、夫・張道懐は単身留学中。その夫が九年ぶりに帰国して喜ぶ秀貞だが、道懐は彼女を騙して離婚し、金持ちの令嬢・林稚瑜と結婚しようとする。その後、秀貞は友人・秀玉から道懐の企みを知らされる。秀玉は稚瑜を救おうと、事実を告げる手紙を出す。後日、稚瑜が母親とともに秀貞のもとを訪ね、三人は手を取り合って互いの不幸を嘆き合う。

「象牙の戒指」(1931)¹⁹は廬隱の友人であった作家・石評梅(1902-1928)の死後、彼女をモデルに書かれた小説である。沁珠は伍念秋と恋に落ちるが、のちに彼には妻子がいることを知る。それ以降、沁珠は彼を拒み続けるが、二人の関係を知った彼の妻から手紙を受け取る。そこには「私はよく新聞を読むので、最近の気風では、男性はしばしばもとの妻を捨てて、新式女子と自由恋愛をすることを知っています」「ああ、沁珠女士！ 同じ女性として、捨てられた妻

の苦悩が分かるでしょう！」²⁰とあり、これを読んだ沁珠は伍念秋との関係を終わらせる。その後、沁珠は曹子卿と愛し合うようになるが、彼にもやはり旧式結婚による妻がいた。彼は沁珠と結婚するために妻と離婚するが、沁珠はそのことで心を痛め「私のせいで人の結婚を壊すなんて、私はひどい罪人だわ。だから私はやはり愛のために独身主義を貫くわ」²¹と決意する。そうこうするうちに彼は病気で亡くなり、彼女も後を追うように病気で亡くなる。

「ある情婦の日記」(1933)²²では、美娟は田舎に妻がいる仲謙にそうと知りつつ恋をし、関係を持つ。仲謙は親が病気になったため帰省する。美娟は彼に手紙を出す、そこで彼の妻について「彼女は旧式女性なのだから、私はなおのこと彼女に同情しなくてはならない」²³と述べる。彼と離れているあいだ、党の仲間に諭された結果、美娟は「私は至上の愛を完成させる。仲謙を愛するだけでなく、祖国を愛するべきだ！」²⁴と決意し、東北での救護活動に参加することを決める。

以上を概観すると、主人公（あるいは中心人物）の女性・男性・もう一人の女性の関係は、①自由恋愛の相手に旧式結婚による妻がいたという場合、②自由恋愛の相手に別の恋人がいたという場合、③旧式結婚の相手（夫）に別の恋人がいたという場合の三通りがあるが、いずれの場合も主人公の女性たちは恋人／夫である男性に別の恋人／妻がいると知ったとき、その女性を敵視することはなく、反対に互いの立場を理解し、同情し合おうとする姿勢が強うかがえる。なかでも、所謂「新式女子」から旧式結婚による妻への同情は顕著である。自由恋愛が広まりつつある時代において、親の命に従い旧式結婚をして婚家を守り、家を出る自由もなければ夫から顧みられることもない「旧式女子」たちが、「新式女子」以上に苦しい立場にあることを、廬隱は十分に理解していたのだろう。

廬隱の作品には作者自身の経歴が多く投影されていると言われるが、廬隱自身も結婚に際して同様の問題に直面したことがあった。廬隱は最初の夫・郭夢良と1923年に恋愛結婚したが、彼は廬隱と知り合ったときにはすでに故郷に旧式結婚による妻がいた。彼は廬隱との結婚を両親に認めさせるため、彼の父親が本妻とのあいだに子どもがいないため妾を迎えたのと同じだと言って説得し、先妻と結婚したまま廬隱とも結婚したのであった²⁵。1925年に夫が病気で亡くなったあと、廬隱は葬儀を行うため生まれたばかりの赤ん坊を連れて夫の実家に赴いたが、葬儀ののち、しばらくのあいだそこで姑と夫の先妻とともに暮らした。先妻

は廬隱に対して冷淡ではなく、廬隱の娘を自分の子のように見なしてくれた一方、姑はやや冷たい態度だったという²⁶。廬隱の作品には、こうした経験が多分に反映されていると言えるだろう。

なお、中国文学に登場する三角関係については、陳平原が「三角関係モデルの文化効能」において論じている。陳によれば、中国文学において三角関係が描かれ始めるのは基本的には二十世紀に入ってからで、それ以前は中国では一夫多妻制がとられていたため、ただ一人の相手を選ぶという、今で言うような三角関係は存在しなかった。その後、近代に入って、林紓の翻訳小説で三角関係が現れる。さらにその後、徐枕亜・章士釗・蘇曼殊ら新小説家たちが三角関係を描いたが、彼らが多く描いたのは男性による「旧女性」と「新女性」という二種類のタイプの女性のあいだでの選択で、それは実際には二十世紀初頭の知識男性による中国か西洋かという二つの異なる文化のあいだでの選択であったという²⁷。

このように女性を「新女性」と「旧女性」に分類する見方は、民国期の中国においてしばしば見られたようである。例えば進歩的な女性雑誌『婦女雜誌』『新女性』の編集長を務めた章錫琛は、以下のように述べている。

現在では真面目くさった顔の老人から少年にいたるまで、常日頃の論調として新式の女子をあだっぼく、軽薄で、おしゃべりで、ぜいたくだと言って痛罵しないものはない。それなのに彼ら自身が配偶者を探す時には、旧式女子はつまらなくて嫌だと思うのである。²⁸

当時の「新式女子」とは、新式の教育を受け、西洋的価値観を持った女性を指し、「旧式女子」とは、新式の教育を受けておらず、中国の伝統的価値観を持った女性を指した。上記の引用に見られる「常日頃の論調」は、男性側の視点から女性を「新」「旧」に分類したうえで配偶者としての適性を一方的に評価づけるものであり、章錫琛はそのような男性たちを批判している。このような男性たちの見方は、上述した小説家たちと同様の女性に対する見方であると言える。

また、やや時代は下るが、林語堂は中国の蓄妾制度に関して、「新」「旧」の女性という点から下記のように述べている。

対等な立場にある他の女性と同じ屋根の下で暮らすことは到底我慢できない

とする彼女たちの近代的意識は理解できるが、もとの妻を情け容赦なく叩き出すモダンガールの残酷さは、私には祖先が持っていた野蛮さと何ら変わる場所がないように思われる。一時代前の真に善良な女性ならば、かりに既婚の男性と恋に落ちて、心から彼を愛するならば、喜んで彼の妾となり、彼の妻に対しては謙譲と尊敬の心をもって仕えるであろう。しかし現在では一夫一妻制の名目のもとで、相手の女性を叩き出してその地位に取って代わることが女性にとってより良い方法だと考えられている。これが現代のかつ自由な、いわゆる文明的な方法なのである。女性がこうした方法を望むなら、彼女たちの望むようにやらせておけばいい。どのみちその影響を真っ先に蒙るのは他でもない彼女たち自身なのであるから。男をめぐる女性同士の争いにおいては、常に若く美しい女性が年増女を犠牲にして勝利するのである。²⁹

林語堂は「一時代前の真に善良な女性」と比較して、一夫一妻制を主張する「モダンガール」を批判し、さらに男性一人と女性二人（以上）の関係によって生じる問題を「女性同士の争い」とみなして、男性自身の問題を不問にしている。

上記で挙げた廬隱の作品中にも「新式女子」「旧式女子」という表現が見られるが、「旧式女子」と「新式女子」は互いの苦境を理解し合っており、男性から選ばれることによる優位性を競うことはない。廬隱は十代の頃、林訳小説や蘇曼殊の作品を好んで読んでおり、また最初の婚約者（のちに廬隱から婚約破棄している）から徐枕亜の『玉梨魂』を借りて読んでいたという³⁰から、彼らによる三角関係を描いた作品も複数読んでいたと思われるが、廬隱の作品に見られる男性一人・女性二人の関係は、それらとは大きく異なっていると言える。

次節では、上で挙げた廬隱の作品のなかでも、女性二人が対面して手を取り合うという点において、男性を挟んだ女性二人の関係がより明確に示されている「藍田の懺悔録」について考察したい。

3. 「藍田の懺悔録」解説

3.1 日記の部分と懺悔録の部分

「藍田の懺悔録」は日記体の小説である。語り手は廬隱自身と同名の隠という

人物である。隠は友人・肖圃から「藍田の懺悔録」と題されたノートを渡される。肖圃の友人・芝姐が送ってきたものだという。隠がそのノートを読むという形をとって、懺悔録の部分が始まる。懺悔録には日付が付されており、日記の体裁がとられている。日付は八月十日から九月十日までの一か月間である。

八月十日には、藍田が日記を書き始めるときの陰鬱な気持ちが記される。八月十一日には彼女の生い立ちから実家を飛び出すまで、八月十四日には学校に通い、何仁と出合って婚約するまで、八月十九日には何任が別の恋人と結婚したことを知って病気が悪化するまでの経緯が記される。またこの日には、公園で偶然何仁とその妻を見かけるという出来事が記されている。そして九月十日には、何仁の妻が藍田を訪ねてくるという出来事が記される。

この懺悔録は、恋愛・結婚をめぐる失敗を中心に書かれている。だが、その事態の経過に従って日記として書かれているわけではない。懺悔録を書き始めたとき、彼女はすでに何任の裏切りを知って失意の底におり、その時点から過去を回想して書いている。したがって、ノートには何任との経緯を振り返る部分（懺悔録の部分）と、その日に起こった出来事が書かれた部分（日記の部分）とが混在している。ここで、日記の部分に注目してみると、そこに書かれているのは、主に友人の芝姐が藍田をかがいしく看病する様子と、何仁の妻が藍田を訪ねてくるという出来事である。

3.2 藍田と芝姐

まず、前者に注目して見てみよう。芝姐は一人で暮らす藍田の部屋を訪れ、散らかった机の上を片づけたり、付き添って眠ったり（八月初十日）、蓮の花を買ってきて枕元に生けたり、薬を煎じたり（八月十一日）と、生活の細々とした面倒を見ている。そして、そんな芝姐に対して藍田は子どものように甘えている。芝姐が部屋を訪ねてきたことに気づいた藍田は「私は宝物を拾ったように感じたが、なぜだか涙が流れてきた。芝姐が『王媽はまだ来ないの?』とたずねると、私は悔しい思いをしている子どもが、大人にその理由を知らされたかのように、声を上げて激しく泣き出した」³¹と、子どもに返ったように泣いている。また、芝姐は藍田を公園へ散歩に連れ出す際に、藍田の髪を優しく梳いてあげているが、この髪を梳くという行為も、藍田にとっては幼少時代を思い出させるものである。藍田は幼い頃に母を亡くしているが、毎朝母に髪を結ってもらっていたこ

とが、母との大切な思い出なのであった。

藍田は芝姐に対する思いを度々記している。

私を愛してくれる芝姐に、どう対すればいいか分からない——このあちこちに危険が潜む場所で、窮地に陥っているとき、芝姐だけが、いつも温かな優しさでこの世への未練を感じさせてくれる。(八月初十日)³²

私は何よりも芝姐に心苦しく感じてほしくない、世界中で芝姐だけが私を憐れに思ってくれる。(八月初十日)³³

ああ、この世界で芝姐だけが私に活路を与えてくれる。最も忘れ難いのは「藍田、健康を大事にして。まだ最後の闘いが残っているのよ。自暴自棄になりすぎちゃだめ」という言葉だ。これは確かに興奮剤となり、絶望した私に前途に望みがまったくないわけではないように感じさせてくれる。(八月十九日)³⁴

これらの記述から、何仁の裏切りに遭って失意の底にあるなか、藍田にとって芝姐は、生きる理由を感じさせてくれる存在であったことが見て取れる。

さて、ノートの前頭には、藍田が懺悔録を書き始める経緯が書かれている。藍田は看病に来てくれている芝姐が眠っているあいだに「心残りもないこの世に残された私の時間はそれほど多くないだろう。もし体の病で死ななくても、心の病で死ぬだろう」(八月初十日)³⁵と悟り、芝姐に隠れて懺悔録を書くことを決意している。

そして、ノートの最後には芝姐の下記の言葉が記される。

ああ、肖圃！ 生きるのは本当に大変なことね。(中略) 藍田の末路は、深く考えたくないけれど、本人は病気は良くならないだろうとっていて、だから「懺悔録」を私に渡したのよ。……人類はひどく残酷ね、きっと藍田の病気が良くなる希望は本当にはないのでしょう。³⁶

藍田は自分の命が長くはないと悟ったうえで懺悔録を書き、のちにそれを芝姐

に渡している。つまり、藍田は芝姐に読まれることを想定して書いているのである。このノートは、日記の体裁を取ることで、懺悔録であると同時に藍田の芝姐に対する親愛の情を伝えるためのものとなっていると言えよう。

3.3 藍田と何仁の妻

次に、ノートの「日記の部分」に書かれていたもう一つのこと、何仁の妻が藍田を訪ねてくるという出来事について考察したい。藍田の懺悔録は、そもそも彼女が自由恋愛による失敗を懺悔するために書き始めたものであり、その顛末はすでに八月十九日に書き終わっている。八月十九日の日記の最後には、「現在、実際のところ神の愛と同胞の心を持つ芝姐のほかは、誰もがひそひそと私の汚点を言い立て、なかには私に面と向かって耐え難いことを言う人までいる！（中略）ああ！ 何も言うことはない、私のこの最も小さな要求に対してすら、誰も押さえつける手を上げて、私が関門を通れるようにしてはくれないのだ！」³⁷と、悲痛な思いが記される。懺悔録は本来、ここで終わっていたはずだった。

だが、何仁の妻が藍田のもとを訪ねてきたことで、さらに九月十日の日記が書かれている。何仁の妻は、夫と藍田の関係を知らなかったことを告げ、「私（藍田）の手を握って『お姉さま、私はお姉さまとは二度ほど顔を合わせたばかりですが、本日お目にかかってみて、心からの同情を抱いております。（中略）ああ！ お姉さま、私たちはともに犠牲となってしまったのです！ まして私はお姉さまには遠く及ばないのに、男の心はなんと当てにならないのでしょうか！』」（括弧内筆者）³⁸と藍田への同情を示し、何仁の非道を嘆いている。

この出来事ののち、藍田の気持ちに変化が生まれている。「もし私が本当に世を去ったら、その時には人々の不要な同情を得られるかもしれないと思っていたが、今では不要になった！ そんなものはどうでもいい！ いくらか慰めになる出来事があったのだ」³⁹「もし病魔に打ち勝てたなら、いま新しい希望が生まれた。残念ながらかすかな希望だが、もし世界の全女性と握手でき、女性たちに新たな紀元を切り開けたなら、私は過去を後悔すると同時に未来のために奮闘するだろう」⁴⁰と、芝姐以外の新たな生きる理由を見つけている。

日記はこの日で終わっており、藍田と何仁の妻が手を取り合うところがクライマックスとなっている。なお、「藍田の懺悔録」と同様に「第三者」の女性との対面が描かれた「時代の犠牲者」においても、主人公の李秀貞が夫・張道懐の恋

人・林稚瑜と手を取り合って夫の非道を嘆くところで秀貞の日記の引用が終わっており、これが物語のクライマックスとなっている。

恋敵とも言える立場の二人が手を取り合うということは、二人が男性に選ばれることよりも女性同士の連帯に価値を見出しているということであり、第2節で挙げたような、女性を「新」「旧」に分断したり、男性一人・女性二人の三角関係を「女性同士の争い」と見なしたりする言説に対する、女性の側からの抵抗となっていると言えるだろう。さらに藍田はこれをきっかけに、世界の全女性とも手を取り合うという、より大きな女性同士の連帯を目指すに至っている。

こうして見ると、ノート「日記の部分」は、藍田の芝姐への親愛の情を記したものであると同時に、藍田が芝姐以外の女性と新たな連帯を結ぶまでを描いた物語ともなっていると言えよう。

3.4 藍田と秀姐

ノートの懺悔録の部分には、過去に藍田を手助けしてくれたもう一人の女性が登場する。故郷で親から意に添わぬ結婚を迫られて泣いていた藍田を励まして逃げることを勧めてくれた、隣人で同じ学校に通う秀姐である。このときの気持ちを藍田は「ああ！ 私のこのときの気持ちは、まるで砂漠をさまよう孤独な旅人が、突然仲間に出会ったかのようにだった——私の孤独、私の悲しみは、彼女にだけ思い切り語ることができた」⁴¹と記している。

これに似た表現が、「時代の犠牲者」にも登場する。訪ねてきた稚瑜から自分も道懐に騙されていたのだと告げられた秀貞は、「母娘の手を握って『林夫人！ ミス・林！ お二人は理解のある方々です。……張道懐のようなペテンで利権に目のない人間は、庇いようがありません。夫人のおっしゃる通り、道懐は本当にミス・林の夫にはふさわしくありません』」⁴²と言う。そして、「私たちは同じように不幸なんだわ！」⁴³との稚瑜の言葉を受け、「ミス・林の話聞いて、砂漠を旅する仲間を見つけたように感じた」⁴⁴と記している。

さらに、似た表現は、廬隠が後年記した「廬隠自伝」にも登場する。それは廬隠が石評梅が亡くなったあとの気持ちを記した部分である。そこには「評梅が亡くなったあと、私は帰る家のない漂泊者であるだけでなく、同時に仲間のいない長距離旅行者となった。このとき私は悲しみの海に沈み、ただ早く死んでしまいたいと、毎日酒を飲み煙草を吸い、ゆっくりとした自殺を試みていた」⁴⁵とあ

る。廬隱と石評梅は北京女子高等師範学校で知り合い、のちに北京師範大学附属中学で同僚として再会した。このとき、二人はともに夫を亡くしており、文学を愛する者同士、石評梅が1928年に病気で亡くなるまで親しく付き合った。

藍田の秀姐に対する思いは、秀貞の稚瑜に対する思いや廬隱の石評梅に対する思いに通じるものだと考えられる。故郷を離れた藍田がその後、秀姐との友人関係を続けられたのかは分からないが、藍田が人生で困難に直面したときに彼女を勇気づけて苦境から救ってくれた存在としての「仲間」であったと言える。

3.5 「懺悔録」の外側の物語

藍田は何仁の妻と連帯を結んだことで新たな生きる理由を見出しているが、最終的には病気は良くはならないだろうことが示唆される。それでは、この女性同士の連帯は、結局のところ非力なものだったのだろうか。ここで、「懺悔録」の外側の物語を見てみよう。藍田のノートは藍田→芝姐→肖圃→隠と、女性から女性へと手渡される。藍田が芝姐に読まれることを想定して書いたノートは、藍田からその親友の芝姐へ、芝姐からその親友の肖圃へ、肖圃からその親友の隠へと、親しい友人の手から手へと渡っている。

芝姐が藍田のノートの最後に記した言葉には「肖圃！ この世で藍田一人ではないのよ……私たちは警戒しないわけにはいかないわ。ああ！ 暗黒と壊滅、それこそが現在の世界よ！」（下線筆者）⁴⁶とあり、肖圃個人に呼びかけると同時に、藍田の苦しみが多くくの女性に共通する問題として捉えられていることが分かる。そして藍田の懺悔録は、作家である隠が作品として発表することにより、読者の女性たちにも共有されるものとなる。藍田には死が迫りつつあるが、彼女の懺悔が女性たちの同情の共鳴を呼ぶことで、この懺悔録は彼女の「世界の全女性と握手」しようという思いを実現する手段となりえたのである。

ショシャナ・フェルマンは女性が読むことと書くことについて、下記のように述べている。

今だかつて、女として正確に自伝と呼べるものを書いた女は私たちの中にはいない。女たちは、自分を対象物として見るように訓練され、「他者」の位置に自分を据えて、自らを疎外するようにと躰けられる。そのため、私たちが手にする物語は、女を映し出すことはない。それは、はなから、物語など

ではあり得ない。むしろ、それは物語になっていく物語であるといえるであろう。物語が物語になることが出来るためには、女たちによる読みの絆を通さねばならない。⁴⁷

芝姐・肖圃・隠、そして読者たちは、「藍田の懺悔録」を読むことを通して、そこに藍田の物語だけでなく自分自身の物語をも見出したことだろう。「藍田の懺悔録」は、一人の女性の物語を、女性から女性へと読みついでゆく様を描くことを通して、藍田から小説の読者にまで至る「女たちによる読みの絆」の力を描き出しているのだと言えよう。

4. おわりに

以上、「藍田の懺悔録」を女性同士の関係という点から考察してきた。ノートの日記の部分には、日記が書かれた現在において、病床にある藍田を唯一勇気づけてくれる存在であった芝姐に対する親愛の情、および何仁の妻と新たな女性同士の連帯を結ぶ物語が書かれていた。懺悔録の部分には、過去において藍田を救ってくれた秀姐が大切な「仲間」であったことが記されていた。藍田にとっては、過去においても現在においても、苦境に陥ったときに力を与えてくれるのは、女性の仲間たちだったのである。「懺悔録」の外側の物語には、女性たちが懺悔録を読むことを通して、未来において女性たちによる読みの絆が広がってゆき、社会的な問題として世に問われるだろうことが示されていた。この作品には、このようにして幾重にも女性同士の連帯が描かれている。そして彼女たちの関係は、「女性弱者の同盟」ととどまらない、女性が女性をエンパワメントしうるものとしてのレズビアン連続体であったのだと言えるだろう。

註

- 1 原題：「藍田的懺悔録」『小説月報』第18巻第1号、1927年1月。
- 2 常彬『中国女性文学話語流変 1898-1949』人民出版社、2007年、p.69。
- 3 劉乃慈『第二／現代性：五四女性小説研究』台湾学生書局、2004年、p.135。
- 4 原題：「時代的犠牲者」『曼麗』北平古城書社、1928年所収。

- 5 胡曉燕「对女性意識の発掘和探尋——試論廬隱的女性小説」『江西教育学院学报(社会科学)』第20卷第4号、1999年、p.91-92。
- 6 孟悦・戴錦華『浮出歴史地表——現代婦女文学研究』、中国人民大学出版社、2010年、p.30。
- 7 原題：「麗石の日記」『小説月報』第14卷第6号、1923年6月。
- 8 原題：「飄泊的女兒」『申江日報』副刊『海潮』第1号、1932年9月18日。
- 9 桑梓蘭(王晴鋒訳)『浮現中的女同性恋 現代中国的女同性愛欲』(国立台湾大学出版中心、2014年、p.145-162(原書：Tze-Lan D. Sang, *The Emerging Lesbian: Female Same-Sex Desire in Modern China*, The University of Chicago Press, 2003)、簡瑛瑛「何処是(女)児家? 試論中国現代女性文学中的同性情誼与書写」『近代中国婦女史研究』第5期、1997年8月、p.137-154、拙稿「日記体小説に描かれる女性同士の愛——廬隱「麗石の日記」論」『近代中国 その表象と現実：女性・戦争・民俗文化』平凡社、2016年、p.81-102等。
- 10 アドリエンヌ・リッチ著、大島かおり訳「強制的異性愛とレズビアン存在」『アドリエンス・リッチ女性論 血、パン、詩。』(晶文社、1989年) p.53-119。(原書：*Blood, Bread, and Poetry — Selected Prose 1979-1985*, New York, W. W. Norton & Company, 1986)
- 11 同上、p.87。
- 12 同上、p.87。
- 13 本節で挙げる廬隱の作品中の男女三人の関係は、旧式結婚によるものも含む。三角関係は中国語では「三角恋愛」であるが、旧式結婚による関係は恋愛とは言いがたい。また、中国では「三角恋愛」を描いた小説は通俗的なものだという認識が強い。だが、恋愛・結婚をめぐる男女三人の関係という意味で、本稿ではこれを三角関係と呼ぶこととする。
- 14 原題：「海浜故人」『小説月報』第14卷第10号・第12号、1923年10月・12月。
- 15 王国棟編『廬隱全集』第1卷、福建教育出版社、2015年、p.399。
- 16 原題：「勝利以後」『小説月報』第16卷第6号、1925年6月。
- 17 王国棟編『廬隱全集』第2卷、福建教育出版社、2015年、p.128。
- 18 同前、p.129。
- 19 原題：「象牙戒指」1~17章を『小説月報』第22卷第6~12号、1931年6月~12月に掲載、商務印書館より1934年に単行本出版。
- 20 王国棟編『廬隱全集』第4卷、福建教育出版社、2015年、p.78-79。
- 21 同前、p.142。
- 22 原題：「一個情婦の日記」『申江日報』副刊『海潮』第18~23号、1933年1月15日~2月16日。
- 23 王国棟編『廬隱全集』第5卷、福建教育出版社、2015年、p.29。
- 24 同前、p.35。

- 25 王国棟「廬隱正伝」王国棟編『廬隱全集』第6卷、福建教育出版社、2015年、
p.163。
- 26 同前、p.165。
- 27 陳平原『二十世紀中国小説史・第一卷（1897年—1916年）』北京大学出版社、1989
年、p.217-225「三角恋愛模式的文化功能」。
- 28 章錫琛「旧式女子与新式女子」『新女性』第2巻第12号、1927年12月、p.1271。
- 29 林語堂（鋤柄治郎訳）『中国＝文化と思想』講談社、1999年、p.256。（原書：My
Country and My People, New York, John Day, 1935）
- 30 王国棟「廬隱正伝」『廬隱全集』第6巻、p.154。
- 31 『廬隱全集』第2巻、p.201。
- 32 同前、p.201-202。
- 33 同前、p.202。
- 34 同前、p.208。
- 35 同前、p.203。
- 36 同前、p.211-212。
- 37 同前、p.210。
- 38 同前、p.210。
- 39 同前、p.210。
- 40 同前、p.211。
- 41 同前、p.205。
- 42 同前、p.316。
- 43 同前、p.317。
- 44 同前、p.317。
- 45 廬隱「廬隱自伝」『廬隱全集』第6巻、p.78。（初出：『廬隱自伝』上海第一出版社、
1934年）
- 46 『廬隱全集』第2巻、p.212。
- 47 ショシャナ・フェルマン（下河辺美知子訳）『女が読むとき女が書くとき 自伝
の新フェミニズム批評』勁草書房、1998年、p.24。（原書：What Does a Woman
Want?: Reading and Sexual Difference, New York, The Johns Hopkins University Press,
1993）